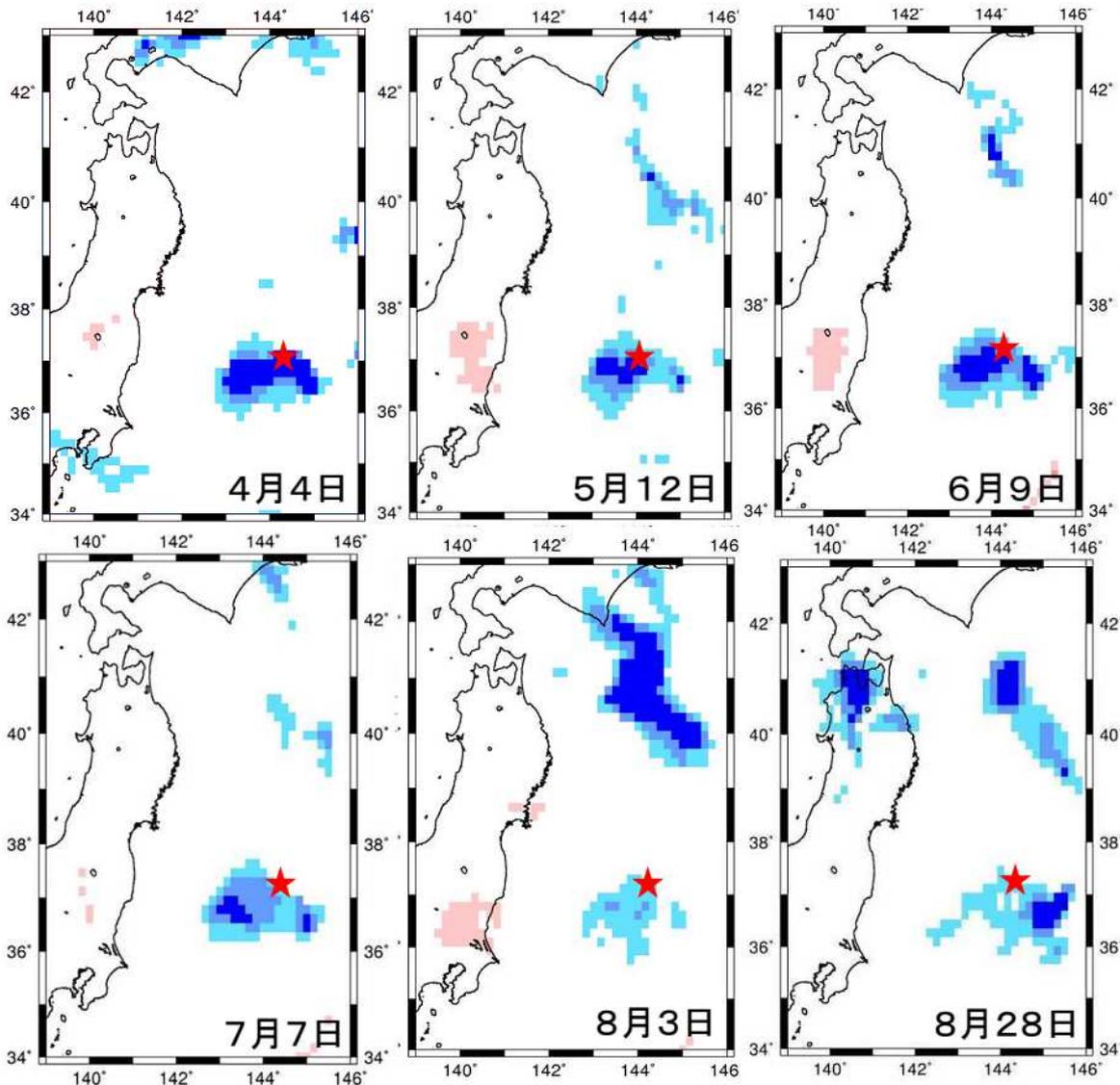


10月26日の福島沖の地震（アウターライズ地震）

4月以降、福島沖の地震活動の異常（静穏化）に着目し、ほぼ毎月報告させて頂きました。9月下旬になり、それまでのパターンが変わり、どうなるかと見守ってまいりましたが、26日未明に M7.1 の地震が発生しました（図中の★が震央）。気象庁からも「アウターライズ地震」という発表があり、津波注意報が発令されました。下の図でもわかるように安定的に異常が継続していたのが福島沖です。また震央は経験的に異常の中心より縁辺部となる事が多いようです。



今後の推移

幸いマグニチュードが7程度であったため、被害が発生する事はありませんでしたが、この地震の余震が、数多く観測されているのですが、その発生の仕方が少し気になります。通常であれば、M7クラスの地震1個に対し、M6クラスの地震が10個、M5クラスの地震が100個、M4クラスが1000個、というようにマグニチュードが1小さくなると10倍程度の地震が発生します。それに対し、“前震”活動の場合、たとえばM6クラスが6個、M5クラスが60個、M4クラス600個というように小さな地震の発生割合が少なくなります。

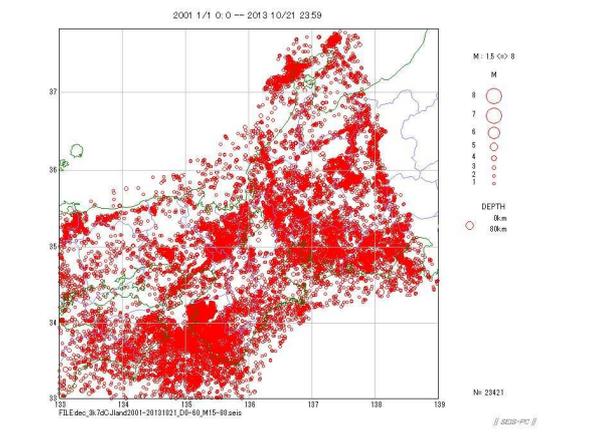
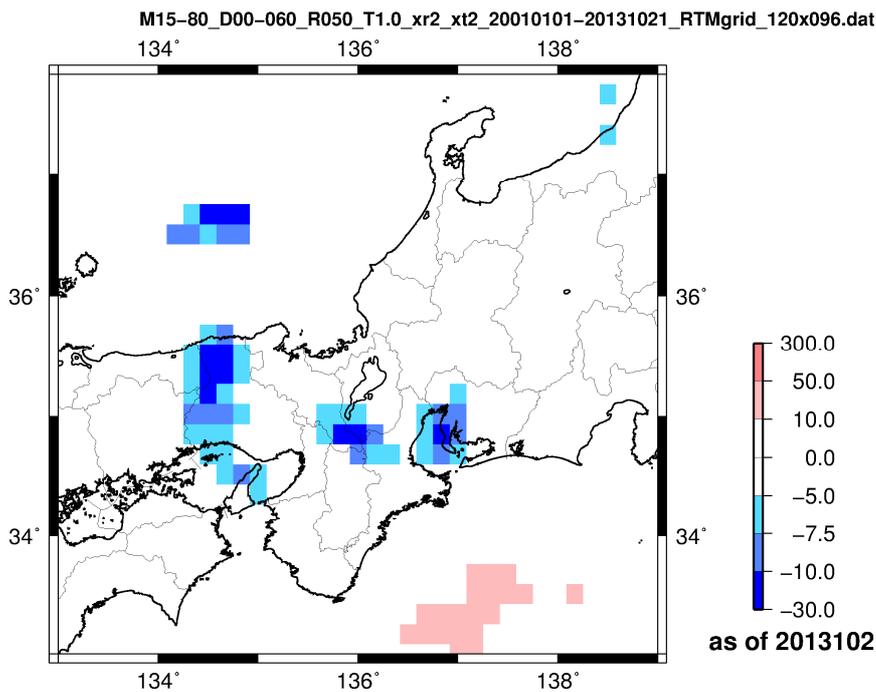
実は現在、通常100個の地震が発生すべきところ、70-80個程度しか発生していません。もう少し具体的に言いますと、現在福島沖のアウトライズで起きている余震活動は実は前震活動の可能性が存在します。まずは今後2週間ほどは十分注意が必要と考えています。実際、2011年3月11日の東日本大震災の2日前（3月9日）にM7.6の地震が発生し、地震学者はこれを“本震”と考えてしまいましたが、3月11日までの地震活動はまさに“前震”活動の特徴を満たしていたのです。

中部地方・近畿地方陸域「地下天気図」

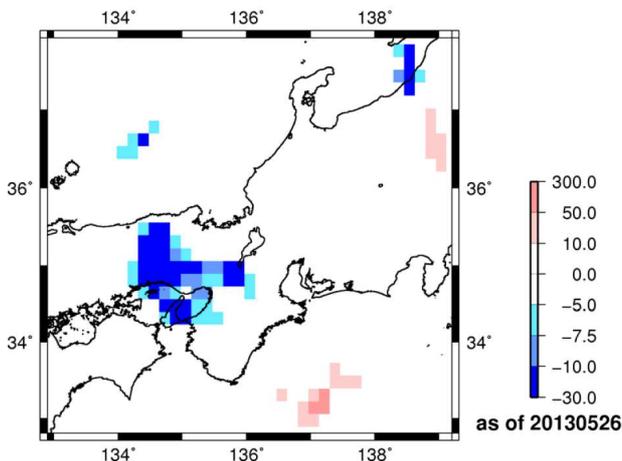
DuMAでは各地域ごとに解析を進めておりますが、これまで何度かお伝えしてきた近畿地方、特に京都から兵庫、鳥取にかけての異常が再び少し気になる状況です。下の図は中部・近畿（一部中国四国地方を含む）地方における地下天気図です。この図では**陸域のみ**に着目しています。

京都周辺での地震活動がここ数年通常と異なっている事はお伝えしてきましたが、改めまして現在**京都・兵庫・鳥取地域**でM6クラスを超える直下型地震の発生の確率が高くなっている可能性大です。地下天気図では経験則として青い領域が消えた後に地震が発生しています。

これまでの経験では異常が消失してから地震発生までは数週間から数か月といったところですが、近畿地方の異常には十分注意を払って監視して参ります。



2013年10月21日の時点の地下天気図®と解析に使用した地震のデータ
現在異常が消えつつある



2013年5月26日時点の地下天気図®
この段階では異常が広がっていた